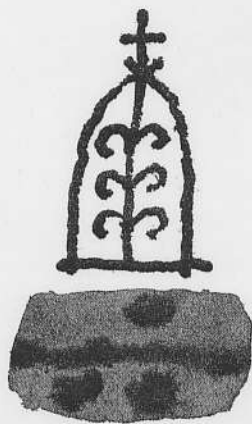


五円玉が縁で

山元 眞

福岡教区司祭



幼稚園が終わってもなかなか帰ろうとしなかった。そのころは、遊びただけ遊べる時代。園庭には門扉もなく、やかましい人もいない平和な時代。フランス人の園長先生はいつもニコニコして園児たちの放課後につき合ってくれた。

遊びが一段落つくと、

「マー坊！」

と呼ぶ声。

「いつものタバコを買ってきてよ」

とお使いを頼まれる。教会の近くにあったタバコ屋に走り、しんせいをかう。園児もタバコを買えた時代だった！

神父様は、いつもおつりがくるようにお金を持たせた。正直なマコト少年は、おつりをごまかさずに返す。そのおつりが、お駄賃に変わることを知っていたから。果たして、神父様はおつりのなかからいつも五円をくださった。そういうことが何度かあった。そのとき思った。

「こんな優しい人になりたいなあ。スータンも格好いいし……。神父様になりたい」

これが司祭職との「ご縁」の始まり。

子どものころには様々な夢を抱く。バスに乗れば、バスの運転手になりたい。家の近くに航空自衛隊の基地があった。飛行機が飛ぶのを見れば、パイロットになりたいし、音楽隊の演奏を聞けば、指揮者になりたい、と思った。神父様を見るだけで、司祭になりたいとは思わなかったが、五円玉を何度かもらうと、神父様になりたいと思うようになった。以来、数ある「夢」のなかに、司祭職が加わった。

いろいろな夢が一つひとつ消えていったが、「五円」が「ご縁」で始まった司祭召命への夢は消えることがなかった。様々な人との出会いがこの夢を支え、必要なときには、いつも必要な人と出来事が与えられた。司祭職実現の片棒を担いだ人は数え切れない。

仲のよいたくさんの友だちと別れ、当然のように小神学校に入った。ま

ったく新しい生活、環境。さらに大神学校へ進んだ。学んだことをひと言
でいえば、「忍」の一字。途中、何度か迷う。
「何も自分が司祭にならなくても……。まだこんなにたくさんの神学生がい
るのに……」

当時は神学生がたくさんいるように見えた。

司祭に叙階されて十五年目になる。振り返って見れば、
「ああ、このために司祭にしていたのか」

ということがいくつもある。そのときはわからなくても後になってわかる
ことが多い。というより、ほとんどのことは、後にならないとわからない
ことなのだ。そのことが最近、わかるようになってきた。

私の司祭召命は、ごく単純なことから始まったように思える。ほとんどの
場合がそうなのではなからうか。是が非でも、という気持ちはまったく
と言っていいほどなかった。力まず、自然に、なるがままに……。そんな
感じだった。

前任地の教会にいるとき、教会付属幼稚園の父兄に誘われて、ときどき
(?) 飲み、行くことがあった。スナックのママが尋ねることは決まってい
る。

「結婚できないの?」

「そんなの自然じゃないわよ。絶対おかしい!」

今のところ、次のように答えることにしている。

「自然じゃないかもね。でも、ぼくにとっては自然。こんな人間がいても
いいじゃない。あなたに神父になれって言ってるんじゃないんだから」

聖パウロのことばがよくわかるような気がする。

「兄弟たち、あなたがたが召されたときのことを、思い起こしてみな
さい。人間的に見て知恵のある者が多かったわけではなく、能力のあ
る者や、家柄のよい者が多かったわけでもありません。ところが、神
は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に

恥をかかせるため、世の無力な者を選びました。また、神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです。それは、だれ一人、神の前で誇ることがないようにするためです。神によってあなたがたはキリスト・イエスに結ばれ、このキリストは、私たちにとって神の知恵となり、義と聖と贖いとなられたのです。『誇る者は主を誇れ』と書いてあるとおりになるためです。』（一コリント 1・26～31）

信徒に向けて書かれたこのことは、司祭召命についてもそのままあてはまる。私にとって、誇るものは何ひとつない。すべては恵みであり、神からいただいたもの。そのことを神に感謝したいし、その恵みの橋渡しをしてくださった多くの方々に感謝したい。そして、私もまた、人々への神の恵みの分配者となれば幸いと思う。

五円玉がご縁で始まった司祭召命の道。五円ではとうてい、買うことの

できない道。神の「やり方」は、まったく時宜になつて美しい。こんな神様を誇りに思います。